

「いまの社会、あすの社会」をよみとく視点

東大名誉教授 稲上 毅氏

労働政策研究・研修機構の前理事長で東大名誉教授の稲上毅先生が、久方ぶりに登壇され、5月31日、労働ペンクラブ会員のために講演して下さった。演題は「いまの社会、あすの社会——「インダストリアズム再訪」。「インダストリアズム」とは稲上先生があえて付けた訳語で「実業の思想」ということ。

この言葉が「いまの社会、あすの社会」の時代を解説するコードともなると言う。なぜか。それは、近代の成立という数世紀前から今日の21世紀にわたって、労働の社会のみならず、日本と世界のあり様を理解し、そしてその批判的視点を提供する視角を与えてくれるからだ。

ここからみれば、現代のように「ファイナンス」つまり金融・資本があまりにも優勢となり、「過労自殺」対策を含む「働き方改革」がいまの政権でもとりあげ議論されねばならないような課題にまで至ってしまっている、そのような、笑うに笑えない時代と社会の「歪み」も焙りだされてくる。

講演の概要

以下は、筆者なりに受け止めた講演の概要である。



マックス・ウェーバーの用語をかりれば「近代資本主義」のイメージというのは、勤勉と節儉にもとづく実業（インダストリー）を旨とし、私益を公共の福祉に結節する、公共の福祉に貢献するもの。したがってファイナンス（資本・金融）はインダストリーのために存在しているのであってその逆ではない。本来、資本主義の「精神」とは「『正当な』利潤を使命として、・・・合理的に追求する精神的態度」ということであつた。そこでは、資本・経営・労働の三者が均衡的關係であることが望ましい。

そうであるのかどうか、産業民主主義、経営民主主義、集团的労使関係の三つのゆくえもここに関わることになる。

いまはこの三者が、資本>経営>労働というように、あまりに均衡がくずれている。たしかに歴史的にみれば資本が経営や労働に優位することが多かった。日本もその例外ではなかった。ところが戦後日本の民主改革（財閥解体・労働の民主化等）後は、さきの三者の均衡関係に関わって、それまでのファイナンス優位からインダストリーがファイナンスに対する「インダストリアリズム」の優位を取り戻すということがおこった。

日本の企業統治のあり方（コーポレート・ガバナンス）の変化を振り返れば、労使が競いあいつつ経営が資本・金融よりも優位である「戦後型経営」が生じた。それはひとつのシステムとして「モデ

ル」を形成した。そのモデルで日本資本主義は発展期を迎えた。それが近年ではかなり変容（転調）したことはあるとしても、たとえば2006年の経団連『我が国におけるコーポレート・ガバナンス制度のあり方について』（「御手洗報告」）は、企業は「社会の公器」、企業の社会的責任の重視、「真の株主」「長期保有株主」の尊重などとしている。また、日本の経営者はいまだ内部昇進型が多く、実体は「使用人兼務取締役」。CEOの報酬を日米で比較すれば日本は10分の1にとどまっている。

1991年からのバブル崩壊後に日本資本主義は大転換したという見方が目立つ。しかし実証的根拠をみるとそれだけで割り切ることはできない。むしろ、問題は出ている。かつての日本の雇用システムは、正規・非正規の労働デュアリズム（二重性）の拡大という転調に入り、そのシステムの功罪が改めて問われる。成員の「生活保障」、ブルーカラーのホワイトカラー化、協調的労使関係、高い企業帰属意識と能力開発、生産性向上などの「功」に対し、「罪」として成員・非成員の身分制的秩序、女性の低い地位と不活用、「会社人間」と長時間労働、企業エゴイズムなどがある。



そして、集团的労使関係モデルの変調によって、労使間の交渉力と情報力の非対称性、集团的紛争から個別紛争へ、「荒廃」し・水涸れする職場、など懸念される現象が増しているという厳しい現実がある。

さらにこの経営・雇用・労使関係の変容は、日本の文化自体までもが、個人主義化、短期主義化、弱い消費者、長時間労働是正の困難、社会の細分化が進み、文化（社会・政治の傾向として）の「小児化」は目を覆うような状況となっていることにも同期している。

さきに大著『ヴェブレンとその時代』（新曜社）を著わされた稲上先生は、このような長大な射程で理論と実証をふまえながら、現代を照らしだす思考体系を、私たちにわずか80分間で、しかも明快かつ平易に講演して下さった。満員の会場（40名）は、このような難易度の高いお話しにもかかわらず新たな視野を獲得しえたと感じたせいか、終了まで実に明るい雰囲気だった。

私たちは日前の回避しえない政策技術的な議論に入るときにも、このような鳥瞰図的な時代認識と批判精神をふまえなければならないのだ、という強い印象をもった。稲上先生には、講演でふれられた「新たな黄金の四角形」の議論を含めた新著を、また期待したいものである。（井上定彦）